

2018年12月NHK近畿地方放送番組審議会

12月のNHK近畿地方放送番組審議会は、19日(水)、NHK大阪放送局において、11人の委員が出席して開かれた。会議では、「NHK経営計画(2018-2020年度)」の修正について説明した後、事前に視聴してもらった、かんさい熱視線「どうなる!? 2025大阪万博」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、1月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	篠 雅 廣	(大阪市立美術館 館長)
副委員長	山 崎 弦 一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会 会長)
委員	市 田 恭 子	(デザイナー集団 Team coccori 事業代表)
	帯 野 久 美 子	(関西経済同友会 常任幹事)
	片山九郎右衛門	(公益社団法人京都観世会 会長)
	小 林 祐 梨 子	(スポーツコメンテーター)
	鈴 木 元 子	(月刊大和路ならら 編集長)
	添 田 隆 昭	(総本山金剛峯寺執行長・高野山真言宗宗務総長・高野山学園理事長)
	田 辺 眞 人	(園田学園女子大学 名誉教授)
	安 井 良 則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)
	山 舗 恵 子	(京都リビング新聞社 編集部長)

(主な発言)

<かんさい熱視線「どうなる!? 2025大阪万博」(11月30日(金))について>

- 行政や経済界では万博誘致が成功するという空気はなかったし、開催に向けても資金をどうするのかなど課題がある中、この番組の制作は難しかったらと思う。テレビは、大阪万博への機運を高めるうえでインパクトがあると思うので、今後こうした番組を作るのだろうが、長期的には、万博を今後どうしていくかを考える番組や、大阪万博をどう未来に発展させていけるかという番組も作ってほしいと思う。

- 万博開催が決まり、急いで作った番組のように感じた。番組を見て、1970年以降、日本ではさまざまな万博が開催されたが、登録博は前回の大阪万博と愛知万博だけだと知った。今回の万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」で、番組でも懸命にどのような博覧会になるか説明していたが、抽象的でありきたりな感じで頭に入ってこなかった。吉村洋文大阪市長のインタビューを聞いても、大阪への誘致に全力を傾けていて、中身はまだこれからという印象で、番組を作るうえで具体的な説明をするには限界を感じた。大阪万博の跡地がI R（統合型リゾート）に活用されることは賛否が分かれると思うが、首都圏に比べて沈んでしまった近畿の経済が少しでも活性化されたらと思う一方で、大阪万博の工期が遅れたり、ばく大な赤字を抱えたりすることを心配している。1970年の大阪万博のあと1973年にオイルショック、1990年の花博のあと1991年にバブル経済がはじけた。どちらも開催中は好景気で、終わったあとは時代の転換期となるような経済危機に直面していたので、万博が開催される2025年は関西や日本にとってどんな年となり、終わったあとはどうなっていくのかと思いつつエンディングを見ていた。

- 万博の建設費用は、国、府・市、経済界で3分の1ずつ負担するということがあった。公共残土で埋め立てをする予定だったが、工期を短縮するため、埋め立て用の土の費用が追加でかかるというのも気になった。さらにインフラなど関連事業費では足りない費用をI Rに依存しようとしている。2兆円の経済効果、予想される来場者数が2,800万人というのはすごいと思うものの、被災地などの復興が進まない状況の中で、多額のお金が動くことに困惑している。一方で、番組の映像については、アーカイブスを利用して、1970年の明るい万博を振り返ってほしかった。「調和」ということばがたびたび出てきていたが、その意味がはっきりとしなかった。

- 番組を見て、万博のことが何となくわかった。期待と不安の両方の要素がいろいろと入っていて、タイトル通りの番組だと思った。世界中のものと未来を同時に見せるのが万博の原点ということだが、パリ万博では動く歩道、ニューヨークの万博では二足歩行ロボットが出ており、これについては人類の技術はそれほど進歩していないと感じた。今度の万博では、学生が中心の団体・WAKAZOに期待したい。国や大企業だけでなく、ベンチャー企業や若者が個人で参加できるかもしれないということは知らなかったのも、これからは最新情報を伝えてほしいと思う。若い世代におもしろい人はたくさんいるので、そういう情報を得て表舞台に出て行きたいと考える人が増えるきっかけになるといいなと感じた。一方で会場建設の工期や、多額の資金を投入することに不安を感じた。また、かなり昔のパリやニューヨークの映像だけでなく、最近開催されたミラノや上海など最近の万博の映像があればもっとワクワクで

きたと思う。最後に、ゲストの嘉門タツオさんが「音楽や笑いも交えて大阪らしい万博ができれば」と話していたが、「大阪らしい」万博になることを楽しみにしている。

- 大阪万博にあまり関心を持っていなかったのので、淡々と受け止めた。1つめは大阪万博の概略、2つめは万博の歴史、3つめは課題と、3つのパートに分けて説明されていて、内容がよく分かった。産業革命後にロンドンで万国博覧会が始まったときの目的を考えると、情報化や国際交流が進んだ中で、わざわざ万博を開催する必要があるのだろうか。前回の大阪万博が開催されたときは、為替が1ドル 360 円の時代で海外旅行にはめったに行けない時代だったので、世界中からさまざまなものを集めたパビリオンは本当に感動的だった。その後、阪神・淡路大震災、東日本大震災、大阪府の北部地震などから復興しきれていない日本が、これほどお金をかける必要があるのだろうか。これからの課題では、万博会場の予定地の夢洲がどうなるのか。また、地下鉄の延伸の話も出ていたが、万博が終わった後に会場や公共交通機関がどうなるのか。さらに、I Rができれば、経済的にはプラスになるかもしれないが、沿線の雰囲気が悪くなるのではといったことなどが気になる。今後は、大阪万博の開催に納得し、応援しようと思わせるような番組を制作してほしい。
- 万博決定から6日後に放送された番組だったので、内容的にもニュースのようだった。私自身、万博のことはまったく知らなかったのので、番組を見て、おおまかに分かった。近所のお年寄りで万博が決定したことに感激している方々が結構いたので、とても興味を持って見た。ゲストが3人出演していたが、嘉門さんが万博通だということは知らなかった。また、あまり万博を知らない立場としてアイドルグループのタレントが出演しており、発信力がある方なので番組を見る人が増えることを期待したのかもしれないが、コメントにもう少し工夫があるとよかったと思う。番組を見てわかったことは、ばく大な資金がかかるということだが、それは番組を見なくても想像できることだ。周りに話してみたいと思ったことは、エッフェル塔がパリ万博のときにできたことぐらいで、万博のすごさはあまり感じられなかった。ゲストの大阪府立大学の橋爪紳也特別教授が「万博のような世界があることを若い人に感じてほしい」と話していたが、WAKAZOの若者たちが、私たちの世代より何十歩も先に歩いている姿を見て、かなり刺激をもらった。7年後の万博に興味を持てるような番組がまた見たいと思う。
- これまで万博に行ったことはないが、2016年度後期の連続テレビ小説「べっぴんさん」を見たときに、1970年の大阪万博は楽しかったんだと感じた。今回の番組はとてもわかりやすく、しっかり知ることができた。テロップが多いのでキャプチャー

を取りながら番組を見て、得た情報を周りの人に話している。県内の観光関係の人たちは、大阪万博はホットな話題だと感じているようだ。番組でいちばん楽しかったのはゲストの嘉門さんで、世界中の人とバッジ交換をしているということだったが、2025年の万博のときには自分もしたいと思った。また、大阪万博の最初の構想段階から関わっている橋爪さんの話に興味を持ったのもっと話を聞いてみたいと思ったし、万博のプロジェクトの資料を探して調べたいと思った。

- 私自身は、多くの方が万博の大阪開催の決定に喜ぶ様子を一步引いて見ている。ただ、番組自体は、開催が決まってすぐに作られた番組で、意識を促すという意味でよくまとめられていて、非常にわかりやすかった。30分の中にいろいろな要素がよく整理されており、3人のゲストも役割を果たしていた。1970年の大阪万博や、それ以降の日本開催の万博の映像をもっと見たかった。番組ではエジソンが撮影した動く歩道の映像が紹介されていたが、エジソンが撮影している様子の映像もあれば見たかった。番組で紹介できなかった課題もたくさんあると思うので、前回の大阪万博以降で当時突き当たった問題をしっかりみつめた番組も制作されることを期待している。インターネットでかなりの情報がわかる世の中になっているが、万博会場で世界のものや生の人間に出会うアナログのよさがあると思う。今の若い人は海外に行かない人も多いが、実際出かけて生のものに触れるよさを番組でも強調すると、万博の意義がより出てくるのではないかと思う。
- 1970年の大阪万博は、「70年安保」のあとのお祭りのような感じで、当時は日本人全体がきたるべき未来に対する希望に満ちあふれていた。それから50年が経過した今、人口減少や、地震や水害のリスク、国際情勢など、不安が先行する時代で、ばら色の未来が想像できない状況だ。前回の万博を経験した人間としては、未来を示すのが万博だと考えると、7年後の開催に対する違和感はある。台風21号で関西国際空港が水没した例もあるため、津波が起きたときに、埋め立て地を会場とした万博は果たして耐えうるのだろうかということもある。開催が決まったからには成功してほしいが、万博に対してたくさんの外国人入場者を見込めるという肯定的な意見がある一方で、震災からの復興が進まない状況で膨大な資金を使っていいのかという意見もあるはずだ。大阪での万博開催が決定した直後としては、この番組は十分だと思うが、これからNHKがどう取材していくのか問われると思う。
- 大阪万博決定直後の番組として、うまくコンパクトにまとめられていたのではないかと思う。番組でも紹介されていたが、若い人が関わっていくことが大事だと感じた。たくさんのお金がかかることなので、万博開催後、「夏草や つわものどもが 夢の

あと」だと言わなくてすむように考えていかなければならないし、SDGsという視点で、大阪の発展に資するものにしていく必要があると思う。これからの準備過程で山あり谷ありになるだろうと思うので、NHKにはいろいろな観点から掘り下げた番組を制作してほしい。番組にはIRのことが出てきたが、「IR」ではなく、「IR(含むカジノ)」と表記するべきだと思う。地下鉄の整備にIR事業者がお金を出すような話を聞くが、万博は半年間しかないので、結局、カジノに行く人のために整備をするように感じてしまう。

- 1970年の万博には行かず、今もあまり関心はない。歴史的にみると、万博の功罪やその役割には疑問も感じている。IRに対するNHKのコメントは、やや歯切れが悪かったように感じる。IRはカジノを含む統合リゾート施設だが、大阪市内でもカジノへの反対意見もあるので、万博の功罪についてはしっかり示すべきではないか。速報性が高かったとはいえ、時代も変わり、バーチャルの情報とリアルの情報を同じ価値と考える傾向の若い人が増える中で、一つの会場にモノや人を集めて、それがどういう意味があるのだろうか、夢洲に一日30万人来る中で、もし台風など災害が発生したら行政はどう対応するのだろうか、とも考える。

(NHK側)

万博の大阪開催が決定したのが日本時間11月24日(土)の午前1時過ぎで、NHKは1時台に近畿地方向け、全国、再び近畿地方向けに、会見も含めて特設ニュースを40分編成した。それ以降、多彩な内容で関連のニュースを伝えているが、11月30日(金)の「かんさい熱視線」は、これまでのニュースを羅列した番組ではなく、独自に企画した番組だ。このように、万博についての報道は総合的にお伝えしている。今後も多角的にお伝えしていく。

(NHK側)

万博の開催地が決まって急きょ立ち上げた部分もあるが、第一弾としてまず決定して何があるのかというところから始めた。これから土や費用の問題などいろいろな課題は出てくるであろうし、負の遺産にならないようにとは思う。そこについては、住民の皆さんの疑問にも答える形で指摘すべきことは指摘していきたいと思う。一方で、喜んでいる人が多いことも事実なので、今回はこのような内容で放送した。IRについてはいろいろと指摘をいただいた。実際、IRの事業者から資金を出してもらって地下鉄を延伸す

るといふ話も出ているので、どうしても万博とセットで語られる部分もある。万博とI Rとをセットで見るべき問題とそれぞれ個別で見るべき問題について冷静に見極めながら、バランスをとりながら伝えていきたい。

(NHK側)

とにかく万博の大阪開催が決まったという事実を理解してもらうために、大阪万博が何をしようとしているのか、そもそも万博とはどのようなものなのかをまず理解してほしいと思って番組を立ち上げた。また、課題として、最近失敗した事例もあるということで、その点も含め紹介した。ただ、具体的な内容が決まっていないということもあり、視聴者にとってはもの足りない部分も多かったと思う。今後は、具体的な話や課題が見えてきたところで、ひとつひとつ丁寧に伝えていきたいと思う。

<放送番組一般について>

- 12月2日(日)のNHKスペシャル 平成史スクープドキュメント 第2回「バブル 終わらない清算～山一証券破綻の深層～」を見た。番組の最後に、元日本銀行副総裁の「迫り来る危機をわかっているにもかかわらず、それを見ないふりをして、結果的に倒産してしまった」というコメントの後、「座して死を待つのか、それとも結果にかかわらず、思い切った施策を展開して局面の打開にチャレンジするのか」というテロップがあった。番組の展開からすると、結局、座して死を待ってしまった山一証券は失敗で、結果にかかわらず思い切った施策を展開して局面を打開すべきだったというようなことをNHKは発信しようとしていると受け取ったが、このコメントを一般化すると問題だと思った。なぜなら「僥倖(ぎょうこう) 偶然に得る幸運のみを当てにして運営していくことは許されない」というテロップで締めていたが、このテロップは、1930年代後半にA B C D包囲網によって石油が絶たれてしまった状態で日本が座して死ぬより、結果にかかわらず、思い切った施策を展開して戦争を始めてしまったことを容認することになると思う。
- 重くて厳しい内容だったが、興味深い番組だった。全体のトーンがとても洗練されていて、ダークなエンターテインメント作品のように感じた。ナレーションの広瀬修子さんの声が非常によかった。今後もとても楽しみだ。オープニングで、時計の針が逆回転してらせん階段を落ちていく映像が非常に印象的で、分かっているが止めら

れない企業悪や、関わってしまったらもう落ちていくしかない関係者の末路を象徴しているようで、「失われた20年」というコピーが白い雲の上に出て少しずれると、雲に黒い文字でそれが映るといった細部の作り込みに意気込みを感じた。ふだんは、経済番組への関心は薄いですが、最初から一気に引き込まれた。番組の中身では、冒頭で、花形の元営業マンがものすごくカッコよく登場していたが、本編では「いつ、くも膜下出血で倒れてもいいと思っていた」「毎朝、会社のトイレが満室だった」と話していて、企業戦士と言われていた人たちの本当の姿を見たような気がして切なくなった。また、社長の号泣会見は記憶にあったが、これも歴史なんだと思った。平成は軽いと感じていたが、起こった出来事は本当に重いことばかりだったとじわじわと思い起こした。平成史と銘打つには、非常によい番組だったと思う。

- 番組は全編通してすごく暗いトーンで、重さを感じながら見ていた。山一証券という号泣会見しか印象がなく、番組を見ていても、出てくる数字やペーパーカンパニーといったものだけでなく、そもそもバブルとは何だったのかよく理解できていない。社会人としては「失われた20年」を生きてきた世代なので、バブルには華やかな人が踊っているというイメージしかなく、番組でバブルのことをもう少し説明してもらいたかった。番組で証言した人々がまるで戦争犯罪人や容疑者のように見えて先入観を持ってしまったが、結局は企業戦士で本当のことを言えなかっただけではないかと少し冷めた目で番組を見た。
- バブルを知らない世代からすると、バブルのころの映像を見てもまるでドラマのようで、空想の世界としか思えなかった。バブルの時代にみんなが高揚していたというのがどのようなものなのかと思いながら番組を見た。山一証券という名前も初めて聞いて、号泣会見のことも知らなかった。同世代に聞いても誰ひとり知らないほどで、語り継がれてもいいぐらいではないかと思った。一方で、それほど驚かなかったのは、最近では大企業による検査データ改ざんの問題や、スポーツ界でもさまざまな問題が起こっており、昔だけの問題ではなくて、平成30年間の中で教訓としなければいけない出来事だと感じた。「ヒラメ社員」や「損失補填(ほてん)」など初めて知ることばかりが多くあって、とても勉強になった。一つだけ気になったのは一流企業に勤めた高学歴の社員たちはその後、どうなったのかということだ。「朝出勤するとトイレが埋まっている」などいろいろと衝撃的な証言で、とても重い気持ちにはなったが、あつという間の50分で、とても引き込まれた。潔く現実を見ることが大事で、問題の先送りや根拠のない期待は、いかに大きな損失につながるかというのもとても勉強になった。

- 海外にしばらく住んでいて、帰国したときにはバブルがはじけた段階で、山一証券の会見はテレビで見た。わかっていない部分もあったが、この番組は相当出しにくいような情報も引き出して作られていたので、とにかくわかりやすかった。最後の「座して死を待つか。それとも結果に拘(かかわ)らず思い切った施策を展開して局面の打開にチャレンジするか。僥倖(ぎょうこう) 偶然に得る幸運のみを当てにして運営していくことは許されない。」というテロップは、8月ごろに放送された戦争を扱った特集番組と重なるような感覚があった。ただ、結論はあれだけではないと思うので、そこだけ少し残念に感じた。

- 世代によってずいぶん見方も違うと思うので、番組の導入部で当時の時代背景を簡潔にまとめたうえで核心に迫っていったほうが、もう少しわかりやすかったのではないか。番組ですごいと思ったのは、当時まさにその隠蔽を画策していた人や、上層部の人、大蔵省の担当者などが当時の話をしていることだ。当時の大蔵大臣の映像や、元大蔵官僚の「当時の姿勢に反省すべき点はある」という発言などから、国全体としても重大事だったことが、知らない世代にも伝えられたのではないか。また、東京大学に膨大な関係資料があることを知ったが、折に触れてひもといていくことも大事だと思った。番組後半で、発覚した時の会議で幹部が責任転嫁ばかりしていたという話や、追い込まれている社員たちの朝のトイレの話や、なぜ木下公明さんが極秘チームに抜てきされてそれを受けたのかというような話などは、組織人としてのサラリーマンの弱さがかなり浮き彫りにされていた。昨今のニュースを見ても変わっていないと思うので、今こそ経営者や企業の経営陣などが見るべき番組ではないか。最後に「常に最悪の事態を想定していかないといけない」というメッセージがあったが、時代が変わっても持ち続けていかないといけないと感じた。

- 株など金融経済に詳しくはないが、それでもこの番組を見てある程度分かるようになったので、よくまとまっていたからだろうと感心した。また、並々ならぬ苦労があったと思うが、特に木下さんを始め、企業戦士と言われる方々にどれぐらいの期間交渉して、こういう証言を撮ることができたのだろうかに興味を持った。外圧にさらされた、日本の護送船団方式というものが一体何なのか、さらにそれが破綻に直接つながったのかということも、分かりやすく説明してもらいたかった。また、山一証券の関係者の罪はわかりやすい一方で、大和銀行ニューヨーク支店巨額損失事件で日本政府が1か月半ほどアメリカに情報を開示しなかったのは隠匿にあたり、同じような罪を犯しているのではないかと思ったが、番組として指摘することは難しいのかと思った。

- 平成の時代が終わりを迎えるに当たって、バブル崩壊を象徴する証券破綻の真相に迫る番組で、非常に深く追及されていた。番組では、四大証券の一つであった山一証券がなぜ経営破綻したのかや、1980年代に法人の顧客から巨額の資金を集めて運用していた証券取引が、1990年代になって株価が下がり始めて発生した損失の補てん、その損失をとばしによって隠蔽し続けていたことなどが、株の素人にも理解できるように説明されていた。当時、日本の経済成長が止まり、株価は長い目で見れば右肩上がりであり続けるといった楽観的な神話が崩壊し、絶対につぶれないとされていた銀行ですら経営破綻して消えてなくなってしまう時代に入り、それ以前の概念が通用しない世の中になったことを思い出した。また、会社や組織のために忠節を尽くして働き続けることが正しいとされていた、それまでの時代の概念がこのバブルの崩壊とグローバリズムの到来によって、根本的に変化し、今も変化し続けているのではないかと感じた。平成は、後にバブルと言われる空前の好景気とその完全な崩壊によって始まったことを強く思い出した。

- 久しぶりに見たしっかりした番組で、制作者の真剣さが伝わってきた。さすがNHKだと思えるインタビューで、その分非常に重い番組だった。ただ、金融庁や日本銀行の当局者たちの証言で「手段はほかになかった」「金融システム全体を崩壊させるわけにいかなかった」などの意見や、最後の元日本銀行副総裁の「常に最悪を想定して、現実になった場合実行する。最悪にならないことを祈るだけは最悪である」という証言はまさにそのとおりで、山一証券のことはニュースで見る以外のことは知らないが、この問題で大蔵省が本当に第三者だったのかは非常に疑問に感じた。NHKでも、日本銀行や大蔵省にインタビューで切り込むのは難しかったのだろうか。山一証券の元幹部の話であらわれていた危機感のなさはいまだに日本の企業に体質的に引き継がれている。それが切り口だったと思うが、番組では、問いかけはあっても答えはなかった。最後まで「あえて座して死を待つか、果敢に行動するか」といった主旨のテロップも答えではなく、その答えをどこに見出していくかというヒントだ。なぜ日本の企業は変わらないのか、日本企業の特有な点など少し掘り下げてもらいたかった。全体的には、今後もこうしたしっかりした番組を作ってほしい。

- 若い世代にとってはバブルがわからないということだが、当時バブルの真っ只中にいたので、今から考えればとてつもないことがいろいろあったことを思い出す。山一証券の破綻の真相は大変興味深かったと思うが、結論として、組織ファーストの考え方や会社経営幹部の自己保身などいくつかあげられているが、基本的に会社をつぶしていくいわゆる王道で、結論自体にはあまり目新しさはなかった。むしろ、どうすればよかったのかという議論が、続きにあればさらによかったのではないのかと思った。

やはりバブルを作ってきた、日本の経済政策なり、金融政策というものの歴史的な見方を一度整理しておいたほうがいいのではないのか。番組では、官僚があまりにもひと事のような証言をしているが、彼らも同罪ではないかと見えてしまう。そういうところに踏み込んでいくと、NHKを評価する人が増えるのではないかと思う。この平成の時代は、自分自身が現役としていろいろ仕事してきた時代ともまさに重なるということから、非常におもしろい番組だった。このシリーズの企画を今後も期待している。

- 組織のあり方についてはまったく変わらないだろうという考えのもと、コンプライアンスや内部告発などの制度が出てくるが、上司に逆らえないといったことなど、それを上回る隠蔽体質が今でもある。こういったことは、おそらく日本型システムだけの問題ではないと思った。

(NHK側)

番組の最後のテロップの表現のことは、重く受けとめた。バブルの背景あるいは時代背景についてももう少し説明をとということだが、編集段階でどの程度伝えていくのが適正か、何度も検討した結果、現在の形になった。また、社員たちのその後は千差万別で、外資系の証券会社にかなりの社員が入ったが、その会社もまた買収されるなど、その後苦労した方が多かったと聞いた。また、出演者とどれくらい交渉したかということだが、ケースによる。交渉にあたって、番組の趣旨などをご理解いただくよう努力した。また、問い合わせがあるが答えがないということについては、掘り起こしたきっちりとした事実をもって伝えるということを一命題にしており、視聴者に知られていない情報やいろいろな弱い立場の方々の情報などを事実として伝えるということを心がけている。

- 「ニュースウォッチ9」でも、キャスターがニュースを伝える際、最後に視聴者へ問いかける形で終わることがあるが、NHKとしてどのようなスタンスをとっているのかと気になっている。

(NHK側)

NHKのニュースは公正中立に事実をわかりやすく伝えて、視聴者が考えるための材料を提供している。特定のスタンスに立つことはない。

- 12月16日(日)に「西郷どん」が終わったが、初回から通してすべて見た。必ずしも歴史の流れを追える作りではなかったかもしれないが、人間ドラマとして非常におもしろかった。オープニングの音楽の明るさがとても骨太な感じで、いかにも大河ドラマらしい曲でよかった。来年の大河ドラマも期待している。
- 「西郷どん」をととても楽しく見た。2人目の妻・愛加那が出てくる奄美大島での物語が長く描かれていたが、これまであまり語られてきてこなかった部分だったので、とてもおもしろかった。ただ、9月30日(日)の台風24号の関連ニュースのため、総合テレビでは放送が無くなり次の週に放送されたが、その際、番組の冒頭では、何の断りも無かったことが気になった。テロップで「台風で休止になった回を放送します」と出してもらえるとよかった。また、4月1日(日)と7月8日(日)の「西郷どんスペシャル」だが、「西郷どん」のドラマを見るつもりでいたら、突然出演者の対談が始まったので、少し驚いてしまった。
- 先日、連続テレビ小説「まんぷく」の第10週「私は武士の娘の娘！」をたくさんの人たちと一緒に見る機会があった。牧善之助が久しぶりに出てきたらどよめきが起き、かつて萬平の共同経営者だった加地谷圭介のチンドン屋が出てきたときは大爆笑で、それぞれの家で「まんぷく」を見ていることがうかがえた。少し年上の女性たちと話をしていたら「ドキドキしながら見ている」といったリアルな声を聞けて、連続テレビ小説に対する思いがすごくあることが感じられた。
- 10月3日(水)のガッテン!「血糖値がみるみる下がる!謎のポーズで体質改善SP」を見た。個人的なことだが、放送の3日前にかかりつけの医師から血糖値が高いと指摘されたので、食生活を変えるのと同時に、番組で見た体操も毎晩行ったところ、2か月後には正常値まで下がった。少し驚いているのだが、こうした番組を今後も放送してほしい。
- 12月16日(日)のNHKスペシャル「アウラ 未知のイゾラド 最後のひとり」(総合 後9:10~9:59)を見た。未知の部族最後の1人というアウラ、これは本当になんとも沈痛なドキュメンタリーだ。19世紀にタスマニアのアボリジニ、チャタム島のモリオリなどの先住民たちに起きたことが、21世紀になっても現実にあるということで、NHKでなければあのような取材ができなかったと思う。とても印象的で感動的な番組だった。

- 「ニュース630 京いちにち」では、たびたび食品ロスのことを取り上げているが、12月6日(木)の「京都クローズアップ」のコーナーで、食品ロスを減らそうと学生たちが「もったいないスーパー」を開いていることが紹介されていた。賞味期限前の食品を捨てられる前に、いろいろなところでもらって、それを無償で提供するスーパーを開いているという話だった。単なるレポートにとどまらず、実際に学生と一緒にリサイクル工場に行って、賞味期限前の物がいかにかたくさん捨てられているかという映像も紹介されていた。とても訴えるものがあったいいと思った。
- インフルエンザ、風疹、伝染性紅斑が流行していて、伝染性紅斑は、妊婦がかかることと死産、流産の原因となる非常に怖い感染症だ。こうしたこともしっかりと調べて、報道してほしい。
- 子どもたちが早い時期からバーチャルな世界に慣れすぎているが、やはり体を動かし、知恵を絞っていろいろなことをつくり出すことが貴重だと再認識してもらえような番組を作ってほしい。オリンピックが近いので、スポーツのほうに人材が流れていくのはわかるが、工芸などのものづくり、伝統・芸能など日本文化のすばらしさを紹介するのはもちろんのこと、その文化を継承していく必要性や価値について、継続的に伝えてほしい。継承されないとあっという間に途絶えてしまう。
- ある民放で、殺人事件の被害者のSNSが番組で利用されていたのを見た。SNSという拡散されることを前提としたコメントであっても、被害者本人が亡くなってからもメディアに出続けていたら、被害者の家族はつらいと思う。法的に問題がなくても、倫理上自粛する必要があるのではないか。

(NHK側)

当事者がどういう方だったかを示すうえで写真やSNSなどを使うことがあるが、どういう形で使っていくかは非常に難しい。映像や写真によっては、非常にネガティブなイメージを喚起させることはあるので、SNSを放送で取り上げる際には慎重に扱っている。

NHK大阪放送局
番組審議会事務局